


 特集 読解力、再び

# リーディング能力をつける指導とは

福岡教育大学 森 千鶴

## 1. リーディング能力とは

本を読むのはおもしろい。しかし読むことはさほど簡単ではないことも知っている。日本語であっても正確には意味がわからない単語もある。さっき読んだところと、次に続く箇所のつながりがわかりにくい…といったこともある。「読むこと」は意外に難しいのである。ましてや外国語である英語となれば、その難しさは倍増する。第一言語（L1）、第二言語（L2）に関わらず、「読む」とはいったいどのようなことなのであろうか。Grabe（1991）によると、「読むこと」には次のような要素が含まれているという。

1. Automatic recognition skills（自動的認識技術）
2. Vocabulary and structural knowledge（語彙と文法構造の知識）
3. Formal discourse structure knowledge（形式的談話構造の知識）
4. Content/world background knowledge（内容的な背景知識）
5. Synthesis and evaluation skills/strategies（統合と評価のストラテジー）
6. Metacognitive knowledge and skills monitoring（メタ認知の知識とモニター技術）

つまり、すらすら読める読み手は、(1) ひとつひとつの単語を瞬時に認識し (2) 語彙と文法知識を駆使する。(3) 形式的談話構造とはパラグラフ構造のことで、たとえば、Comparison-ContrastやCause-Effectなどがある。流暢な読み手はそうした談話の構造を把握しており、読む時にその知識を利用する。(4) 内容的な背景知識とは、内容スキーマと呼ばれるもので、その個人が持っている知識や経験の枠組みを指す。流暢な読み手は読んでいる時、そうした知識を援用する。(5) 統合と評価とは、いくつかの情報と比較し、読む目的にあっている情報がどうか

を評価し、取捨選択することである。(6) 最後に、メタ認知とは、「認知の知」と呼ばれ、自分自身の読み方を客観的にモニターし、足りないところがあれば意識的に補うストラテジーである。

さらに「読むこと」は、基本的にパラグラフ単位、つまり談話（discourse）レベルで行われるので、談話の文法とも言われる結束性（cohesiveness）の理解と処理も重要になってくる。結束性とは、文と文のつながりが目に見える形で表出しているもので、たとえば代名詞（he/sheなどの人称代名詞やit、thisなど）や接続詞（butやso）、副詞（consequentlyなど）が含まれる。パラグラフを読むということは、一文を超えたレベルで、文と文のつながりを理解することなので、この結束性を理解していなければ、流暢に読むことは難しい。

## 2. ボトムアップ・プロセスとトップダウン・プロセス

人は読んでいるとき、どのようなプロセスを経ているのか。一般的にはボトムアップ・プロセスとトップダウン・プロセスが提唱されてきた。ボトムアップ・プロセスとは、単語からフレーズへ、フレーズから一文へ、といった、小さなところから積み上げるようにして読み進めるプロセスであると考えられている。一方でトップダウン・プロセスとは、読み手が主体的に、ある「予測」を持って読み進めているという考え方である。たとえば、読み手は文章のタイトルや最初の1-2文を読んで、内容についてある予測をする。読み進めるうちに、その予測が正しいかどうかを検証し、正しくなければ修正しながらさらに読み進めていく。最初の予測をするとき、重要になるのが読み手の内容についての背景知識である。一語一文レベルの読みでは

解決できなかった問題を、この背景知識の利用によって解決できるとされている。

この2つのプロセスは、もちろん概念的なモデルであるが、より現実に近いモデルとして‘modified interactive model’（修正された相互作用モデル）が提唱されている。（cf. Grabe and Stoller, 2002）「修正された相互作用モデル」とは、ボトムアップ・プロセスがその基本になっている。前節で述べた「自動的な単語の認識」と「語彙と文法知識」の利用が効率的に行われていれば、必ずしも背景知識や文脈からの手がかりに頼る必要はないという考え方である。つまり、読み手がボトムアップ・プロセスでつまづいた時にのみ、トップダウン・プロセスに移行し、たとえば背景知識を利用ながら問題を解決し次に進んでいるというのである。

### 3. 流暢な読み手について

前述したことから総合すると、流暢な読み手は「語彙の知識が豊富で語彙を瞬時に認識し、文法の知識を使用して文構造を把握し、パラグラフ（談話）構造の知識も持っている上に、代名詞などの結束性を導く単語が何を指すかも理解している」ということになる。しかもそれらひとつひとつを速いスピードで行い、つまづいた時には途中で諦めるのではなく、背景知識などを利用して修復することも知っている。つまり、流暢な読み手を育てるためには、これらひとつひとつを教えつづけることと、「読むこと」によって「読む力」を育成するという2つの方向性が必要になるであろう。

### 4. 文法訳読方式は絶対に悪なのか

1980年代にスキーマ理論が提唱され、トップダウン・プロセスの考え方が主流であったころから、文法訳読方式は悪者として槍玉にあがってきたように思われる。主な批判としては、「訳せても意味を分かっている場合がある」「一文一文訳すのは時間がかかりすぎる」「訳すことに時間をとられ、聞く・話すなどの他技能の訓練ができない」などである。確かにそのとおりである。しかし、前述したように、昨今のリーディング理論ではボトムアップ・プロセスを見直

し、それを基本に据える動きがある。それに、訳して初めて意味が分かったという経験は誰にでもあるのではないかと思う。そうになると、ボトムアップ・プロセスの王道である文法訳読方式の価値も見直されても良いのではないかと私は考える。特に「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」などの総合的な科目においては、その読み物で語彙も文法も教えなくてはならない。そうすると、生徒自身が予習の段階でかなりのことを理解している場合を除いては、徹底したトップダウン・プロセスを用いた指導はむしろ難しいのではないかと思える。ただし、いくらボトムアップや訳読式を見直すとはいえ、その実施の仕方は考え直す余地があろう。

文法訳読方式はそもそも文法指導が主目的であった。しかしこれからはリーディングのための文法訳読方式を考えなくてはならない。つまり、ひとつのパラグラフはいくつかの文法構造の集まりではなく、まとまった意味を持ったひとつの単位であるという認識から始めるべきである。そのように捉えるならば、すべての文を一文一文訳す必要は生じない。訳さなければ理解が困難であるような文（おおむね新出文法が含まれている文）や内容的に大事な文だけを訳していけば良いのではないだろうか。訳し方も後ろから繰り上がるのではなく、なるべく前から訳すように心がける。また訳している最中に代名詞や接続詞がでてきている場合は、それらが何を指すか、また次にどうつながっているかを尋ねることで、文を超えたレベルを意識させることができる。さらにパラグラフの終わりにくるごとに要約するという作業をさせれば、パラグラフをひとつのまとまりとして捉えさせることができると考える。具体的な事例は次の節で取り上げることとする。

### 5. リーディングの3つの指導過程

リーディングのプロセスについて、昨今では「修正された相互作用モデル」が提唱され、ボトムアップ・プロセスが再び着目されていることはすでに述べたとおりである。しかし一方ではトップダウン・プロセスの効用も無視することはできない。これらのことをベースにして、リー

ディングの指導過程には pre-reading, while-reading, post-reading の3つの段階があるとされている。

### 5. 1. pre-reading

読む前の活動や発問を指す。池野（2000）は、読解前発問の目的のひとつとして「関連の背景知識の活性化：題材文のトピックについて学習者が知っていることを思い出させるような発問を行う。」と述べている。（p.77）これはトピックについて学習者が知っていることを思い出させ、題材文を読む際の助けにしたり、先を予測するための材料を与えることになり、トップダウン・プロセスにつながる。たとえば *CROWN English Series I Lesson 3 Abu Simbel*（ナイル河に沿って点在する世界遺産のひとつ）ではタイトルの下に Rebirth on the Nile という副題がついている。またさらにその下に Trouble brings experience and experience brings wisdom. という16世紀の諺が載っている。授業で生徒と一緒に読み始める前に、これらの英語が何を意味すると思うか着目させることにより、生徒は Rebirth, trouble, experienceなどをキーワードとして、読みの手がかりにするであろう。また本文に出てくる新出単語や新出文法もこの段階で押さえておき、本文を読み始めたら内容に集中させることが重要である。

### 5. 2. while-reading

実際にテキスト本文をどのように読み進めていくか、ということである。先にあげたリーディングのための文法訳読方式はボトムアップ・プロセスを促すひとつの方法である。むしろ、予習の段階で文章のほとんどの意味を分かっているようなレベルの高い生徒であれば、英問英答式のトップダウン・プロセス重視の方法で授業を進めていくこともできる。大切なのは、前述したように、本文の内容理解から離れないようにすることである。次に示すのは、訳読を取り入れた基本的にはボトムアップ型の進め方である。

さきほどの例と同じ、*CROWN English Series I* の Lesson 3 Abu Simbel の一パラグラフを例にとってみよう。（便宜上、下線と番号がつけてある。）

In the middle of the twentieth century, the Egyptian government thought about building a new dam. ① What they wanted to do was to control floods and provide electricity and water for farming. However, there were problems. ② They knew that the water would rise and flood the valley for several hundred kilometers, and that many farmers living there would have to be moved. ③ Another problem was that the rising water would cover some of Egypt's greatest monuments. The most important of ④ these were the temples of Abu Simbel.

このパラグラフは、Abu Simbel 神殿の説明の後に続くパラグラフである。このパラグラフでは新たに dam の話が出てくるので1-2行目でそこに着目させた後、下線部①を生徒に訳させる。ここでは What they wanted to do が関係代名詞 what を含んでおり、重要構文に指定されている。次に下線部②が何を指しているかを確認した後、「ではエジプト政府は何を知っていましたか。2つあります。」と問えば生徒は that 節を探しあてるのではないかと思われる。下線部③で Another problem といっていることから、前の箇所は「問題点」でもあったことを理解させた上で、that 以下を訳させる。そうすれば、生徒は問題が複数あることを理解でき、上から5行目の problems との関連も明らかになる。最後に下線部④ these が何を指しているかたずねる。

このように問題点を明らかにした上で、政府が取った手段、つまり Abu Simbel を64メートル上の崖に移築するという案の理解へつながっていく。さらにこの Lesson の最後から2つ目のパラグラフには次のような記述がある。

At first, no one could think of a way to solve the problem of Abu Simbel. Should they sacrifice a monument in order to improve the lives of the people? Or should they sacrifice the well-being of the people to save a monument? In fact, there was a third way. Human ingenuity and international cooperation found a third way.

このパラグラフは、この話全体のまとめとなっている部分である。このようなパラグラフをただ全文訳して終わるのはとてももったいない。ここぞとばかり a third wayは何を指すのか発問し、生徒にもう一度考えさせ、日本語でも良いから答えさせることが重要である。英文を読む指導とは、ただ文法構造の理解を集積していくのではなく「なるほど、こういう話か！」と最後に納得させることなのである。

### 5. 3. post-reading

本文を読んだ後の練習問題や活動を指す。重要な語彙や文法項目の復習も重要であるが、それだけではリーディングの本質を生徒に分らせたことにはならない。リーディングは楽しみのために行うこともあるが、主には知識を得るためや情報を収集するためのものである。学習指導要領（英語Ⅰ、言語活動）には、「英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。」と記載され、その説明として「…読んだ内容について、賛成や反対などの意見を述べたり、簡単な感想を述べたりするような活動を有機的に関連させることが大切である。」と書かれている。つまり読んだ内容を材料にして活動を行うことで、「読むこと」の意義をよりいっそう意識させることができるということである。再び *CROWN English Series I* の Lesson 3 Abu Simbel を例にとると、本文部分のあとの Comprehension の Summary や、Feedback の質問 2 (They solved the problem by moving the temples. Do you think it was the best way? If not, what would you suggest?) などが読みにつながる post-reading 活動といえるであろう。また pre-reading において投げかけられた問い (Rebirth とは何を指していたのか) に答える形の活動であれば、全体としてより統一感を保つことができる。

### 6. おわりに

今回は英語Ⅰのテキストを例に取り、pre-reading, while-reading, post-reading の指導過程に沿って、ひとつの方法を提示してきた。要約すれば、語彙力の増強や文法の習得、一文レベ

ルの正しい理解などのボトムアップ・プロセスはもとより重要であるが、同時にトップダウン・プロセスをも意識させ、読解の助けにできるようにする、ということになろう。これらは日常の地道な指導の中で培われる部分が最も多いと思われる。その一方で、「読むこと」によって「読む力」を育成するという方向性もある。これは、生徒をなるべく多くの読み物に触れさせ、英語を読むことへの抵抗感を少なくさせる手法である。そのためには多読 (extensive reading) が最もふさわしいと考える。Day and Bamford (1998) に詳しく述べられているように、生徒の英語力の範囲内で教材を選べる graded readers を使用し、生徒に自ら選んで読ませ、簡単な読書レポートを提出させるという方法である。自律的で流暢な読み手を育てるためには、こうした「読むことそのもの」に特化した取り組みも必要となろう。

#### 〈参考文献〉

- Day, R.R. and Bamford, J. (1998), *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge University Press.
- Grabe, W. (1991), Current Developments in Second Language Reading Research, *TESOL Quarterly*, 25, 3, 375-406.
- Grabe, W. and Stoller, F. (2002), *Teaching and Researching Reading*. Longman.
- 池野修 (2000), 「第6章、読解発問」高梨庸雄・卯城祐司 (編著) 『英語リーディング事典』 (pp.73-88). 研究社.

